第二十二章　聞く力と聞かない力

「子ども未来給付金を受け取れない親がいます」

久しぶりに山本が記者会見中の総理に迫る。総理が首を傾げながら応じる。

「私は困っている人の意見を聞くことにしています。それはどのような方なのですか」

「ご存じないのですか？　夫と別居している実質シングルマザーです。給付金は夫に振り込まれます」

しかし、総理の返事はつれなかった。

「それは夫婦で話し合って解決するものです」

「聞かなかったことにされるのですか」

「想定外です」

「冷たい言葉ですね。誰が考えても想定内のことです。本当に給付金を必要とする人に支給されない。そんなことがあっていいのでしょうか？」

山本が食い下がる。しかし、総理は聞く耳を持たなかった歴代総理と同じ行動をとる。つまり無視して会見場を後にする。山本は諦めない。

「総理は聞く力をお持ちですが、それ以上に強力な聞かない力をお持ちなのですね！」

一瞬総理の足が止まるが再び力強く歩き出す。山本は政府関係者や警備員に羽交い締めにされる。

＊

もちろん強烈な批判が起こる。そうすると総理の「聞く力」がムクムクともたげて新しい方針を発表する。再び記者危険が開かれるが山本は入場を拒否された。

「いわゆる母子家庭に十万円を給付することにします」

胸を張る総理にある記者から質問が飛ぶ。

「さすが、総理。しかし、事実上夫婦関係が破綻している夫への給付をどのようにして子育てする母親に振り替えるのですか」

「母親の方に申請していただくことになります」

「財源は？　これにかかる事務経費はいくらかかるのですか」

「新型コロナウイルス対策費から給付します」

「そうすると『子ども未来給付金』ではなく『子どもコロナ給付金』ですか」

「実質は子ども未来給付金です」

ここで自称シングルマザーと名乗る女性記者が質問する。

「じゃあ、子育てしない夫が受け取った十万円はどういう名前の給付金になるのですか？」

総理が絶句する。

「返還を求めるのですか？　それともご自由にお使いくださいと？」

この鋭い指摘に同調する記者が増える。

「制度的に欠陥があるのに無理矢理実行した点に問題があるのでは？」

「子ども未来給付金制度は国民の、とくに将来の我が国を背負う子どもたちの未来を明るくするためのものです」

「それほど重要で高尚な政策なのになぜキチンと給付ができないのですか。現金とクーポンを半々にするとか妙に細かいことを指示する割には根本原則が抜け落ちています」

「そのようなことはありません」

「必要とする子どもに届かないどころかシステム設計そのものがいい加減で、子育てしない親に給付したり余分な事務経費をかける。これが現実です」

総理は口をもぐもぐさせるが言葉にはならない。何とか記者会見を打ち切りたいようだが放映されているので動けない。

『私には聞く力がある』と日頃からアピールされていますが、給付金受給権利を持つ親から意見を聞いたことがあるのですか？　あるいは尋ねたことはあるのですか？」

「……」

答えない総理を見て田中がつぶやく。

『聞く力はある』けれど『言う力はない』のか」

先ほどの女性記者が続ける。

「何かあれば専門家委員会だの第三者委員会を立ち上げて耳を傾けてしっかりと迅速に政策を実行すると言っている割には今回の子ども未来給付金制度は体をなしていません。聞く力がないどころか、聞かない力が強い」

ここで記者が一斉に記者会見場から出て行く。これまで総理や政府関係者が一方的に会見を打ち切って逃げるように会見場から消えることはあったが、今回は違った。特にこの女性記者の腹は据わっていた。田中はこの女性記者が山本が変装しているのではないかと確信する。

＊

さらにやっかいな問題が生じる。政府の対応の甘さを突いて子ども未来給付金を二重に受け取る者が現れる。

「そんなバカな！　でもどうやって？」

田中は口元で憤慨しながら目元を傾げる。すぐさま山本が応じる。

「細かく説明すると流行るかもしれないから一言で説明するわ」

田中が耳をダンボにすると大家も補聴器を確認する。

「偽装離婚するの」

「なるほど。そうすれば二十万円貰える」

田中が合点するがあきれ果てた表情に変える。

「じゃが、そこまでして……」

大家の言葉を遮って山本はたしなめるように諭す。

「そこまでしても子ども未来給付金を必要とする困窮家庭があると言うことです」

大家が大きく頷く。

「選挙があるから半分人気取りで金をばらまこうとしたのじゃろうが、教育を無償化するなりして根本的に教育改革しなければならん。それをほったらかしてつまらないことをするからひずみが露呈するのじゃ」

「なるほど。選挙対策ワイロですか」

第二十二章　聞く力と聞かない力